

# LGBTQ（性的マイ

2014年に改正されたオリンピック憲章には、性別、性的指向によって、差別を受けることなく権利や自由が保障されなければいけないことが盛り込まれています。

近年、性的マイノリティへの配慮が進み、2012年のロンドン大会で23人の選手がカミングアウトをしています。2016年のリオデジャネイロ大会では、女子7人制ラグビーのブラジル代表選手の一人が競技場の運営に携わる恋人の女性からプロポーズを受けたというニュースが報道され、56人の人がカミングアウトしています。イギリスでは、大会の翌年、同性婚が合法化しています。日本でも2015年から同性パートナーシップ条例などが各地で制定されています。

※ 性的マイノリティの人たちを表す場合、LGBTやLGBTQ、SOGIなどの表記があります。

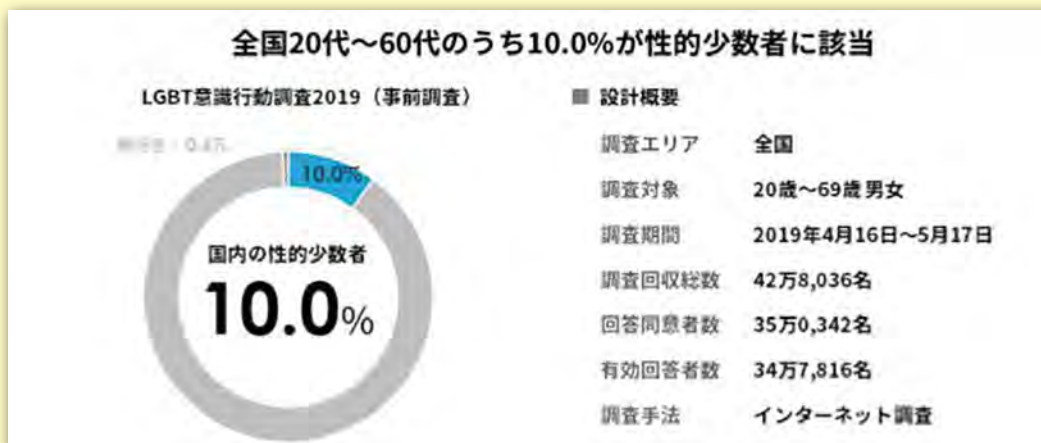
※ LGBTQとは、L=レズビアン、G=ゲイ、B=バイセクシャル、T=トランスジェンダー、Q=クエスチョニング（LGBTのいずれでもない性的マイノリティ）の略です。

※ 性的指向 (sexual orientation) とは、人の恋愛・性愛がいずれの性別を対象とするかを表すものであり、性自認 (gender identity) とは、性別についての自己意識を意味します。両者を合わせ、“SOGI”と呼ばれることもあります。性的指向は、自分の性自認を前提として、同性/異性のいずれかが好きか又はその両方か、という問題ですが、性自認は、自己の性別についての自分の認識それ自体を問題とする概念です。

## ～LGBT総合研究所「LGBT意識行動調査2019」の結果～

全国20～69歳の個人42万8039名（有効回答者数34万7816名）を対象にした事前調査の結果、LGBT・性的少数者に該当する人は約10.0%と判明しました。また、当事者の78.8%が誰にもカミングアウトしていないこともわかりました。

認知が急速に高まる一方、理解が一層求められている状況があります。半数以上の当事者が、国・自治体・企業の対応が必要と回答しています。



# ノリティ) とスポーツ

～今、学校現場では～

文部科学省は、「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(通知)」の資料として教職員向けパンフレットを作成しています。

その中に、支援の事例として、自認する性別の制服・衣服や体操着の着用を認めることや水泳での戸籍上男性の上半身が隠れる水着の着用を認めるなど、学校生活での具体的支援の事例を挙げています。

スポーツは、人を成長させ、社会を変えていく力をもっているとと思うけど…。

近代スポーツの成立の背景には、男性中心の社会の視点があるといわれています。見方を変え、個人差の視点が必要。女性、スポーツ弱者や性的マイノリティの人々にとって安心して活動できるような繊細な配慮が求められています。

東京2020大会のコンセプトの一つに「多様性と調和」という言葉があるよ。開催を通して差別解消の大きな契機になる可能性が期待されているよ。



「プライドハウス」を知ってますか？

2010年のバンクーバー冬季オリンピックではじめてつくられました。国際スポーツ大会を通じてLGBTQ当事者や支援者、選手、観光客など誰もが安心して過ごせる居場所としてつくられました。その後もオリンピックやサッカーのワールドカップなどで世界各地に設立・運営されてきました。今回のオリンピックでも、ラグビーのワールドカップに続いて「プライドハウス東京」として運営されています。

政治や宗教観とも密接に関係するので、難しくなりがちなLGBTQ(性的マイノリティ)の問題について、スポーツが果たせる役割は大きいように思います。

プロリーグやスポーツブランドなどがすすめる人権問題への支援活動は、企業の社会的責任(CSR)でもあり、アスリートを含むすべての人が自己の性的指向や性自認を安心して公表できる環境づくりに貢献しています。そして、このことが、多様性を認め、「排除しない社会」をめざす動きにつながっていくことが期待されています。